

飲水思源

町長 松岡市郎

今は昔話(?!)

小さかったころ、昭和30年代の話であるから、半世紀以上も前のことである。田んぼに水を引く小川が流れ、小さな池のようにものが家の近くにあった。小さな昆虫網を池に入れるとヤチウグイ(北海道だけに生息)が入り、小川には数種類のドジョウが泳いでいた。忠別川の蛇籠(じやかご)の下にはカジカがいて、草にミミズを縛って垂らすと釣れた。夏にはトンボが手に止まり、トンボ採りを楽しんだ。夜、草むらでホタルが飛び交うのを見ることができた。どの家にも同年代の子供が3人以上はいた。遊び仲間と川で泳ぎ、網を持ってウグイやコイなど珍しい魚や大きなものを求めて出掛けた。忠別川近くの浅い川で、上級生の子たちがヤマベを大量にすくっていたのを見ていた。近くにある川なのに僕たちの知らない川だった。

山にはザルガニ(ザリガニの意)がいたし、セミの鳴き声に奏でられ、「簡単に捕まえることが出来る」と友達が言うので、捕まえにも行った。背丈より高い草木にセミが止まり、簡単に数十匹捕まえて帰った。

秋には山ブドウ狩りに行って、口の周りが赤くなり舌が痺れるほど食べ、近所のスモモの木に登って虫食いのものまでよく食べた。おいしかった。

春と秋には田んぼが野球場となる。近所の仲間数人での野球だが、どれだけ遠くへ球を飛ばすことができるかを競った。田植えや稲の収穫作業は、みんな手で伝っていた。

冬は柳の木を削ってチャンバラをし、雪の上を20分も歩いてスキーに行った。大きな雪像づくり、スポンから手袋までカチカチになって帰ってくるのだが、実に楽しかった。

四季それぞれに自然との関わりがあり、自分たちで工夫して遊びを創(つく)り出した。上級生が良き指導者であった。今は子供がいなくて遊ぶ相手がいらない。いても習い事などで時間帯が合わない。遊びを安全に出来る専用の場所と指導者が必要だという。

この半世紀で時代は変わった。中学校までは遊ぶことが日課だったが、今は遠い昔話である。

万引き家族(一般書)

是枝裕和/著 宝島社/刊



柴田家は高層マンションの谷間に取り残された古い木造平屋に住む6人家族。祖母の年金だけを頼りの綱にして、足りない生活品は万引きで賄ってきた。ある日父親の治が、突然「じゅり」という少女を連れて帰ってきた。驚く妻の信代だったが、家から閉め出され虐待を受けていると思われる少女の家庭事情を案じ、家族として一緒に暮らすことに。今年のカンヌ国際映画祭で最高賞映画作品の小説版。

不便でも気にしないフランス人、便利なのに不安な日本人(一般書)

西村・ブベ・カリン:著 大和書房:刊



フランス人ママ記者が見たりアルな日本。「ナンパするのがあたりまえのフランス人、知らない人とは会話すらない日本人」「正解を求めるのが日本の教育、創造性を育むのがフランスの教育」「お金があっても心配する日本人、お金がなくても気にしないフランス人」一。日本とフランスの比較の中から見えてくる、心が自由になる生き方のヒント。

貸し出し図書 ビデオ紹介

せんとぴゅあⅡ ほんの森

7月、せんとぴゅあⅡに新図書室「ほんの森」がオープンしました。新図書室では本の貸し出しも始まりました。

★本、DVDの蔵書リクエストをお受けしています
図書、紙芝居、雑誌は一人合計10点まで15日間、DVDは一人2本まで8日間

世界を救うパンの缶詰(児童書)

菅 聖子:文 やましたこうへい:絵 ほろぶ出版:刊



パン屋の秋元さんは、阪神大震災の被災者から「乾パンのように長期保存ができる、やわらかくて、おいしいパンはありませんか?」という声を聞いて、防腐剤無添加で3年間おいしさをそのまま保存でき、小さな子どもから歯の悪いお年寄りまで食べられる『パンの缶詰』研究に取り組みました。小さなパン屋さんが世界を救う「奇跡の缶詰」物語。